



色付いたリンゴを収穫する多田さん

養原町の県道沿いにある観光農園「多田リンゴ園」では、約1畝の敷地に、「ふじ」や「秋映」など5種類のリンゴの木が500本と、ナシやブドウなどが植えられています。この広大な農園を案内しながら「今年も豊作で、おいしいリンゴができた」と笑顔で話すのは、園主の多田宰資さんです。昭和11年、徳島県名西郡神山町で生まれた多田さんは、リンゴ農家の長男として、幼少の頃からリンゴの栽培に携わってきました。多田さんに転機が訪れたのは、昭和31年の20歳の時。都城都島高校農業課程（現・都城農業高校）の教師から、温暖な地域でリンゴを栽培していた多田さんの父親が、本市でのリンゴ園誘致と、その栽

# Smiling faces of miyakonojo 人の風景

培指導の依頼を受けたのです。その翌年、多田さんが現在の農園の土地を一から開拓。リンゴ栽培の指導を行うことになりました。

苗木を植栽した当初は、学生らを実習の一環として栽培を管理。多田さんは本市と神山町を行き来して指導を行っていましたが、結婚を機に、移住を決意。昭和36年、妻の豆子さんと共に、リンゴ専門農園「多田リンゴ園」を開園しました。リンゴは本来、夏の暑さに弱く、寒暖の差で色付くため、寒冷地での栽培が向いている果実ですが、品種改良や栽培方法の工夫により、南九州でもリンゴ農家が増え、本市でも多田さんがリンゴ園を始めた当時は、近郊にも数十軒のリンゴ園がありました。しかし、収穫までに多くの時間と手間を要するリンゴ栽培は、そのほとんどを手作業で行うため、多くの労働力を必要とし、加えて天候被害や栽培の難しさから、次々とリンゴ農家が減少。やがて市内唯一のリンゴ園となってしまいました。多田さん自身も、材料費の高騰や度重なる災害などの被害で経営が悪化。一度は閉園に追い込まれました。その後、野菜生産で生計を立てていましたが、「都城で、もう一度真っ赤に輝くおいしいリンゴ

を作りたい」との夢を諦めきれず、昭和46年、農園を再開。リンゴ狩りに向いた背の低い木を植栽するなどの工夫をし、現在まで夫婦二人三脚で汗を流してきました。

多田さんに、苦勞してもなおリンゴ生産者であり続ける理由を尋ねると、「リンゴを作るのが好き」なだけ。大きく真っ赤に育ったリンゴを収穫する時が一番楽しいと笑顔を見せます。「栽培方法をさらに改良し、今よりもっとおいしいリンゴを作って、父親を超えたい」と目を輝かせる多田さんは、リンゴ一つ一つにたっぷりの愛情を注いで大切に育てています。



右から多田さん夫婦と作業派遣の2人

これからもおいしいリンゴを  
作り続ける

観光農園「多田リンゴ園」  
園主

さいすけ

**多田 幸資** さん  
(蓑原町)

リンゴ・梨・ブドウ狩りは10  
月下旬まで開園

※開園期間など詳しくは、電話  
で問い合わせください

☎22-4803